

徒然草 上段



成敏

はじめに

徒然草

つれづれなるままに、日ぐらし、硯にむかひて、心に移りゆくよしなし事を、そこはかたなく書きつくれば、あやしふこそものぐるほしけれ。

日本文学史上不滅の光を放ち続ける随筆「徒然草」の序段である。知らない人はいない、と言っても過言ではないほど有名な書き出しだ。作者は吉田兼好、今から約670年前に書かれた作品である。しかし、我々がこの作品について知っているのはこれだけだ。

「ねえ、徒然草って知ってる？」

「ああ、知ってるよ。つれづれなるままに日ぐらしっていうやつだろう。確か吉田兼好だったよな、作者は。古典の授業で暗記させられたよ」

「ふうん、それじゃあ、そこはかたなく何がかけられているの？」

「え？、そこはかたなく？・・・なにが？・・・知らない・・・」

徒然草は全二百四十三段からなる巨大随筆である。随筆、つまりエッセイである。恐らくこの作品を読破した人はそう多くはないだろう。そういう私自身、二十数年前に購入した文庫本をつい最近になってようやく読み終えたところである。

過去に何度も挑戦してはみたものの挫折の繰り返しで、今回もまた初めのうちは古文の難しさにくじけそうになった。しかし、今度こそ二十年越しの思いを達成するぞ、という思いで何とか前に進む事ができた。読み進むうちに「あれ？兼好さんてなかなか面白いんじゃない？」と思うようになった。

時々心にグサッとくるような段があったり感心させられる段があったりで、グイグイこのエッセイの面白さに引き込まれていった。六百七十年前に書かれたとはとても思えない斬新な作品である。

ただし、「兼好さん、面白い」と思えるようになるまでが大変だ。いくら詳細な注釈が付いていても、現代語対訳がついていても、やはり読みこなすのは非常に難しい。まず注釈を読んでも注釈そのものの意味が分からない。現代語訳をしていただいた先生方には申し訳ないが対訳を読んでも面白くないのだ。

そこで私はできるだけ多くの人にこの素晴らしいエッセイを読んでもらえるよう、誰にでも理解できる現代語訳でお届けしたいと思ったのです。しかも面白くて現代人にも役立つと思われる段を抜粋して紹介したい。

国語の先生や古文を研究されている方々にはお叱りを受けるかもしれないが、しかしこれを機に古典文学に興味を持つ人が増えるかも、ということでご勘弁願ひましょう。

何よりこの超現代語訳を手がけたいと思った真の目的は、六百七十年前に発せられた兼好さんのメッセージが今を生きる私たちに直接語りかけられていることを多くの方々に知ってもらいたいということだ。

いかに文明が発達しようとも人間の本質は今も昔も少しも変わっていない。百年前も千年前も年寄り「今の若いもんは」と言っていたし、若者は受験勉強に苦しみ、恋に胸を傷めていたの

です。

兼好さんの呈する苦言やユーモアを素直に受け止め、あなたの人生に役立ててもらいたいと思います。

ひとりごと、なりたいもの

序段 ひとりごと

つれづれなるままに日ぐらし・・・、つまりこれといって毎日することもないし暇だなあ。だけどただブラブラしているのも何だし、何かしなきゃ。

とりあえず机に向かって心に浮かぶいろんなことを全部書き出してみるか。

我ながらちょっとバカバカしい気もしないでもないが、書けるだけ書いてみるとしよう。

第一段 なりたいもの

さてこの世に生まれたからには誰でも、こうありたいとか、こうなりたいと願うことも多いだろう。

しかし、初めに断っておくが天皇にだけはなろうと思ってはいけない。天皇の位というものはまことに畏れ多く、なろうと思ってなれるものではない。何より子々孫々に至るまで、種が違うのだから、種が。ただただ尊いというしかない。

摂政や関白などになれたら言うこともないが、朝廷から舎人という護衛付きを許されている貴族もまたいい。こうした人たちはたとえ官位が低落したとしても、子や孫の代ぐらいまでは上品さと優雅さを保っている。

それより下級の身分の人たちでも運が良ければ出世することもできる。出世したからといって得意顔しているのを見ると、自分では偉いと思っているかもしれないが傍から見ていると実にくだらない。

また、坊主ほど羨ましくないものはない。あの清少納言も枕草子の中で「世間の人に木の端くれみたいに思われる」と書いているが、なるほどもっともだと思う。勢いがよくて騒げば騒ぐほど偉いとは思われない。名誉ばかりに執着して仏の教えに背いていると増賀上人も言ったらしいではないか。

それに比べて私のように世を捨て真の修行をする人は人々の共感を得るだろう。

人は容姿が良いに越したことはないが、それよりも話が上手で愛嬌があり、かといって口数の多くない人というのが良い。そういう人はいつまでも一緒にいて楽しい。

逆に立派な人だと思っていた人が予想に反してつまらない本性を覗かせたりするのは本当に残念だ。

容姿や家柄というのは生まれつきのもので仕方ないとしても心はそうではない。磨けば光るはずで、今より素晴らしくならないはずがない。しかし、いくら容姿や家柄が良かったとしても教養がなくてはどうにもならない。そういう人は身分の低い人の間に入っても逆に圧倒されてしまう。まことに残念なことだ。

男として身に着きたいことは本格的な学問、作文、和歌を詠むこと、楽器を演奏すること、また朝廷の官職や儀式のことにに関して人の手本になることだ。字も下手ではなくすらすらと書き、酒の席では音頭を取り、あまり酒は強くないので、と一応は辞退しておきながら全く飲めないというわけではない。こういうのが男として素晴らしい。

色恋、長寿、色欲

第三段 色恋

万事に優れていても女に夢中になれない男は男としてつまらない。まるで底のない玉の盃だ。とても役に立たない。中途半端で物足りないという感じがするのだ。

夜露や朝露に袖を濡らしながら行くあてもなくさまよひ、親の小言や世間の噂に気の休まる暇もなく、ああでもない、こうでもないと思いは乱れて少しも眠れない。そういう思いをするのも趣があっている。かといってやたらに淫らな振る舞いをするということではないので女からも軽々しく思われない。そういうのが男として望ましいあり方である。

第七段 長寿

京都の小倉山の麓にあるあだし野の墓地の朝露が、朝日に輝きやがて消えていくのを見ると、ああ、人の命もこのように消えていくのだなあ、と思う。

また鳥部山の火葬場の煙が空に消えていくのを見ると、人の命もこのように昇天するのだと思える。

しかし、あだし野の露は消えず鳥部山の煙は立ち去らない、つまり、人の命が永遠だとしたら何とつまらないことか。人の命は定まっていなからいいのだ。

命あるものを観察してみると、人間ほど長生きするものはない。かげろうは夕方まで生きていられないし、夏の蝉は春も秋も知らない。それを思うとのだかに一年を過ごせるだけでもありがたいではないか。ましてや人生は長いから、その命を不足に思い惜しいと言うならば、たとえその命が千年あったところで一夜の夢のように感じることだろう。

限りある寿命、老いて醜い姿を待つことに何の意味があるのだ。寿命が長ければそれだけ恥をかくことも多い。長生きしたとしても四十そこそこで死ぬのが見苦しくなくていい。

四十を過ぎると容姿を気にすることもなくなり、それでいてやたら人前に出たがるようになる。やがて子や孫の将来の成功を見るまでは死ねないと言い出す。長寿を期待し、むやみに名利をむさぼるようになり、物の情趣もわからなくなっていく。まったく情けない。

第八段 色欲

人の心を惑わすものでは色欲に及ぶものはない。人の心は何と愚かなのだろう。

例えば匂いなどは仮のもので一時的に衣装に焼き込めたものとわかっていながら、何ともいえない匂いには必ず心がときめいてしまう。

久米の仙人が洗濯をする女の脛を見て神通力を失ったという話があるが、わかる気がする。手や足が美しく、ちょっとぽっちゃりめで肉付きが良かったりすると、その色気きたらもう色欲の極みなわけで・・・、いくら仙人といえども仕方のないことだったのだ。ましてや我々のような俗人が色欲に勝てるはずがない。

清貧、春夏秋冬

第十八段 清貧

人はまず質素でなければならない。贅沢を避け財産を持たず、名誉や利益をむやみに欲しがったりしてはならない。古来、賢人と呼ばれた人で裕福だったのは稀なことである。

唐の国に許由という人がいたが、彼は財産どころか何の家財道具もなく水でさえ手で掬って飲んでいたという。ある人がそれを見てどんなにか不便だろうと思って瓢箪をくれてやったのだが、ある時瓢箪が風に吹かれて鳴ったのでうるさいと思って捨ててしまった。そして以前のように手で掬って水を飲むようになった。許由の心はどんなにか清々しかったであろうか。

孫晨という人は冬の間も寝具がなくて、持っているものは一束の藁だけだった。夜はそれを敷いて寝て朝にはそれを片付けていたという。

唐の人々はこういう生き方を立派だと思っていたのだろう。だからこそ書物に書き残して今に伝わっている。果たして日本人はどうだろうか。こんな人がいたとしても書物に書き残すどころか変人扱いするばかりで、語り継ぐなんてことはしないのではなかろうか。

第十九段 春夏秋冬

季節の移り変わりほど趣のあるものはない。

誰もが「特に情趣が深いのは秋だ」と言うが、そのことについて異論はない。しかし、まずは春からみてみよう。

春の景色は心をうきうきとさせてくれる。鳥の啼く声も格別に春らしく長閑な春の陽がさしている。垣根の日陰に草の芽が出始める頃から更に春は深まり、一面に霞がかかり桜も次第に見頃になってくる。ちょうどその頃、雨や風が続いたりして心配しているうちに花は散ってしまう。青葉になるまで何かにつけて心は落ち着かないままだ。

夏のたちばなの花の香りは「皐月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」と和歌に詠まれているように昔の人を思い出させるということで有名だが、それよりも春の梅の香りはもっとすごい。まるでその時にタイムスリップしたかのように恋しく思い出させてくれるのだ。山吹が咲いているのも藤の花がおぼろげに咲いているのも、春の景色はすべて捨てがたい。

初夏になって旧暦の四月八日の灌仏会のところや四月中頃の葵祭りの頃、若葉が梢に涼しげに茂る頃は趣も人恋しさも増すものだと言ったそうだが、まさしくそのとおりだ。

五月、菖蒲を葺いて端午の節句を祝う頃、苗代から苗を取って田植えを始める頃、水鶏の鳴く声が戸を叩くように聞こえたりする頃など、心さびしくならないはずがない。その心さびしさがいいのだ。

六月になって粗末な家に夕顔の花が白く咲いているのが見えて、蚊遣火の煙がくすぶっているのもまたいい。夏の終わりを告げる六月祓えもまた趣があっているものだ。七夕祭りもまた優雅なものだ。

だんだん夜が寒く感じられてきて雁が鳴いて渡ってくる頃、萩の葉が下の方から色づき、早苗が刈り取られて干されるなど、秋にはたくさんのことが一度にやってくる。また台風の翌朝の様子なども何とも言えずいいものだ。

このように書き続けてみると、みな源氏物語や枕草子などで言い尽くされているような気がするが、同じことを言ってはならないという法律があるわけでもないし、言いたいことを言わないのは体に悪いし、とにかく言いたいことは言わせてもらおう。それに、「そこはかたなく筆にまかせて」、どうでもいい慰みごととして書いているものだし、どうせ人に見せるつもりもないし、書いた後破り捨てるつもりなのだから。

さて、草木の冬枯れの様子も秋に劣るものではない。池の水際の草にもみじの葉がひっかかっていたり、霜がたいそう白く見える朝、庭に引いた鑓水から水蒸気が上がったりするのもまた趣深いものである。

年の瀬も押し迫って人々の慌しく新年の準備をする様子も特に感慨深いものだ。見る人もいない冬の欠けた月が冷たく冴える二十日過ぎの夜空ほど心さびしく感ぜられるものはない。

仏名会や荷前の使いが出発する様子などは尊厳な思いがするものだ。朝廷の政務や儀式など新年を迎える準備として行われる行事が重ねて催される様も実にたいしたものだ。大晦日の夜の追難の儀式から元旦の四方拝に続くのもおもしろい。

大晦日の夜、月もなく真っ暗な中、松明などを灯して真夜中まで人の家の門を叩いたりして走り回って大げさに騒いでいた連中が、夜明け近くになってさすがに静かになると、年が去ってしまったことに寂しさを感じるものだ。

こうして明けゆく空の景色は昨日と変わったようには見えないが、元旦の夜明けというだけで打って変わって珍しい気がするのだ。

都大路は家々に門松が立てられ華やかでうれしげな様子であるのもまたすばらしい。

できた女 1、イヤミ、できた女 2

第三十二段 できた女 1

九月二十日ごろある方に誘われて夜明けまで月を見て歩き回ったことがあった。その方が急に思い出された様子で寄りたところがあるというのでそこへ行くことになった。その方は私に中の様子を伺わせてから部屋に入っていかれた。私は外で待っていたのだが、夜露に濡れた荒れた庭に漂ってきた上品な香の匂い、耳に止まらぬほどの忍び声、とてもしみじみとした雰囲気だった。

しばらくしてその方は出てこられたが、私は見送りに出てきた女の人がとても優雅に思えたので、しばらく物陰から様子を伺っていた。女は男を送り出した後、玄関の戸をもう少し押し開けて月を眺めていた。男の姿が見えなくなるまで、さりげなく見送っているのだった。

送り出された後すぐに戸が閉まり、鍵をかける音が背中に聞こえてきたとしたらとても寂しいものだ。その女は男にそんな思いをさせない心遣いをしていたのである。

まさか男を見送る自分の様子を人が伺っているなんて誰も思わないだろう。つまりこの女は日ごろからそういうことを心がけていたのである。できた女だ。

その女の人はいくらも間もなくして亡くなったと聞いた。

第三十五段 イヤミ

字のうまくない人が遠慮なく手紙をどんどん書くことは良いことだ。しかし、下手な字で手紙を書くのはみっともないからと他の人に代筆させるのはイヤミなものだ。

第三十六段 できた女 2

長い間女の家を訪ねないで放っておくと、どれほど恨んでいるだろうと心配になってくる。日ごろの自分の無沙汰を悔やみつつ、うまい言い訳のことばを探してみるがなかなか思い浮かばない。そんな時、女の方から「ちょっと人手がいるのですが、誰かいたら寄こしてもらえませんか」と手紙が来る。実に思いがけなくてうれしいものだ。

そうした気遣いを持っている女こそ好ましいと誰かが言っていたが、まったく同感だ。

名利

第三十八段 名利

人生名誉と利益を追いかけることに忙しく休む暇もなく一生苦しむのはまことに愚かな事である。あまりに財産が多いとそれを守る事に精一杯で自分の身を守る事がおろそかになる。だいたい財産というのは害を呼び寄せ災いを招くものなのだ。たとえ全世界を買える財産をもったところで、死後に残された人々にとっては迷惑なものとなる。

愚かな人生を喜ばせる快樂もまたつまらないものである。大きな車、肥えた馬、金玉の飾りも物の道理を知る人にとっては意味のない愚かなものに映るだろう。黄金は山に捨て玉は川の淵に投げるがいい。欲に惑う人は特に愚かな人である。

高い位に昇り優れた人間となり、いつまでも埋もれる事のない名声を世の中に残したい、と思うことは誰でも願う事であろうが、果たして位が高く高貴な人だけを優れた人ということができるか。愚かでも良い家に生まれ運が良ければ高い位に昇り贅沢を極めることもある。優れた賢人や聖人が卑しい身分のまま時にも恵まれず終わってしまうことも多々あった。

ひとえに高い位に昇りたいという名誉欲は金銭欲に次いで愚かな事である。

この人は知恵と心の人であったと言われる誉れこそ残したいものであるが、よく考えてみると誉が欲しいということは人の評判を喜ぶことである。誉める人も誹る人もいつまでも生きているわけではない。どこからかその名声を伝え聞いた人だって死んでしまう。そんな中で自分の名声を誰に恥じ誰に対して知ってほしいと願うのか。名声は誹りの元でもある。さらに死後の名声は自分にとって何の益もない。

名声を願うことは次に愚かなことである。

それでも名声を得るためではなく自分の為知恵者になりたい、賢人になりたいと願う人のために敢えて言わせてもらおう。

知恵がついて人は偽るようになる。才能も人間の煩惱が発展拡大したものである。他人から聞いたものや学んで知ったものは本当の知恵とは言わない。ではどんなものを知恵と言うのか。またいかなるものを善というか。

実は世の中で言う可とか不可というものも、はっきりと区別できるものではなくて、ひとつながりに存在するものなのだ。

本当にできた人には智もなく徳もなく功もなく名もないのである。この人は徳を隠して愚者の振りをしているのではない。元々、賢いとか愚かだとか、或いは得したとか損をしたというような低い境地にいる人ではないのだ。だとしたら、誰がそれを知って誰がそれを伝えることができるだろう。誰にもできることではない。

人間が迷った心で名誉や利益を追求することはこんなものである。欲望の対象となるすべては否定されることになる。言うに及ばず願うに及ばないのである。

尊い教え、今すぐやる 1、今すぐやる 2

第三十九段 尊い教え

ある人が法然上人にこんなことを聞きました。

「念仏を唱えているときに眠くて念仏の行を怠けてしまうことがあるのです。どうすればこの眠気を克服できますか」

法然上人は

「目の覚めているときだけ念仏したらいいでしょう」

と答えたというが、とても尊いお話だと思う。また、

「往生はできると思えばできるし、できないと思えばできないかもしれない」

とも言われたそう。

これもまたありがたきかな。

第四十九段 今すぐやる 1

年をとって時間に余裕ができたなら仏道の修行を始めようなどと、その時を待ってはいけない。古い墓の多くは若い人のものである。思いもかけぬ病に倒れ急に世を去らなければならなくなったその時になって初めて、今までの過去の間違いに気づくものなのだ。

間違いというのは他でもない。すぐにしなければならぬことを後回しにし、後でもいい日常のことをやっているうちに生涯が過ぎてしまい後悔することである。その時になって悔やんだところでもうどうにもならないのである。

人はただ無常、つまり死が迫り来ていることをしっかりと心に留めて片時も忘れてはならない。そうすればこの世に汚れることも少なく、仏道に勤める心もまじめでいられる。

禅林十因という書物にこういうのがある。

「昔いた聖は大切な用があると訪ねてきた人に『今火急のことがあってすでにそこまで迫っている』と言って耳を貸さず念仏をしてついに極楽往生を遂げることができた」

また心戒という聖はあまりにもこの世が一時的で儚いことを思って、静かに膝をついて座ることもなかった。

第五十九段 今すぐやる 2

人生が変わるような大事なことを思い立ったときは、たとえ心にかかる捨てがたい様々な事柄があったとしても、それらをそっくりそのまま捨てるべきである。

「ちょっと待てよ。先にこれだけは終わらせておこう」

「あのことも処理しておこう。このことについては人に笑われるかもしれないからちゃんとしておかなくては」

「長い年月がかかるわけじゃないし、あまりせっかちなのも何だから、これが終わってから」などと思っていると捨てがたいことばかり重なって、いつまでも尽きることなく、いつになって

も行動を起こすことができない。

だいたい人を見ていると「やってみようかな」程度の志ではすべて先に述べたようなことで一生が過ぎてしまう。

隣の火事で逃げ出す人が「もう少し待ってみよう」などと言うわけがない。わが身が助かるためには恥をも顧みず財産をも捨てて逃げるだろう。

命は人を待ってはくれない。死のやってくることは洪水や火事が攻めてくるよりも速く、逃れることもできない。

まさに今死ぬという時に老いた親、幼い子供、主君から受けた恩、人の情などが捨てがたいと言って捨てないでいられようか。

デジャヴー、色んな嘘

第七十一段 デジャヴー

名前を聞くとすぐにその人の容貌が推測できるような気がするのに実際に会ってみると予想したとおりの人などいない。

昔の物語を聞いて、その話はこの家のこのあたりで起こったのかと思うと話に登場する人々も現在の人々と重なって見えたりする。そう思うのは私だけなのかなあ。それとも誰でもそんな想像をするのかしら。

それからどうかした折に、ちょうど今人の言っていることも今目に見えている物も、自分の心の中に、こんなことがいつかあったな、いつとははっきりしないが確かにあった気がすることがある。それも私だけが感じるものなのだろうか。

第七十三段 色んな嘘

世間で語り伝えられていることは事実では面白くないのか、多くは嘘である。人は尾緒をつけて話す上に、まして年月が経過し場所も遠くなると好きなように語り継がれ、しかも書物になったりすると物語が完成してしまう。

それぞれの専門の芸の名人の素晴らしいことなど、その芸に通じていない人はやたら神のごとくに崇めて言うけれど、その道のプロは少しもそうは思っていない。実際に見ると聞くとでは何事も違うものである。

まあ、色んな嘘があるものだが、すぐにばれるとわかっているのに口から出任せに喋り散らすやつは、やはりすぐにばれてしまう。

また自分でも、そうじゃないと思うんだがなあ、と思いながら人の言ったとおりに鼻の辺りがピクピクしながら言うのはその人の言った嘘ではない。

いかにももっともらしく、ところどころで不審そうにしながら、良くは知らない振りをして、そうしておいて話の端々に辻褄を合わせながら語る嘘は恐ろしいものである。

また自分の名誉になるような嘘を他人から言われたとき、人は言い争ってまで否定はしない。

人が皆で面白がっている嘘を、自分だけ「そんなでもなかったよ」とは言えなくて黙って聞いていると、「お前もそう言ってたじゃないか」などと証人にされて、その嘘がますます本当のことのように決定付けられていく。

とは言うものの、神仏の霊験や神仏の権化として現れた人間の伝記などについてはそう一概に信じてはいけないというものでもない。こうした言い伝えは世間一般の嘘と同じように本気で信じるのも馬鹿らしいからといって「そんなのあるわけがない」と言ってしまうと身も蓋もないので、とりあえず本当にあったんだと話を聞いてあげて、ただ闇雲に信じるのでもなく、また疑って馬鹿にしてもいけないのである。

自然の法、知ったかぶり 1、天中殺、訓戒

第七十四段 自然の法

身分の高い人も低い人も、年老いた人も若い人も蟻のように東西に急ぎ南北に走り、出かけて行ってまた家に帰り、夜に寝てまた朝に起きる。

何のためにそんなに一生懸命になっているのか。長寿をやたらと願い利益を追求してやまない。養生して長生きしていったい何を待つというのか。期待したところで待っているのは老いと死だけではないか。このふたつの到来は速やかにして一瞬も止まることがない。これらを待つ間に何の楽しみがあるというのか。

ところが人々はこれらを恐れない。名誉や利益を追求することに夢中になって、このふたつが目前に迫っていることを知ろうとはしない。

愚かな人々は老いと死が迅速にやってくることを悲しむ。それはわが身がいつまでも変わらぬことを願って、すべては変化するものだという自然の法を知らないからなのだ。

第七十九段 知ったかぶり 1

何事も知っていても知らない素振りをしている方がよい。立派な人はよく知っていることであってもそう知ったかぶった言い方はしない。田舎のおのぼりさんがすべてのことを心得たような返事をするのである。それゆえ聞いているこちらが非常に恥ずかしくなる。当の本人は自分を偉いと思っているのだから見苦しいことだ。

よく知っていることであっても必ず口数少なく慎重にして、訊かれないかぎり言わないというのが立派なことである。

第九十一段 天中殺、大殺界

赤舌日という日のことは陰陽道では特に問題にしていない。昔の人もその日を忌み嫌ってはいなかった。近頃になって誰かが言い出してその日を忌み嫌うようになったのだろう。

その言うところによると、その日に始めたことは最後までうまくいかないと言われ、その日言ったこと、してしまったことは思いどおりにならず、手に入れたものは失い、企画したことは成功しないという。

まったく馬鹿げている。

吉日を選んで始めたことで最後までうまくいかなかった数を数えてみるがいい。赤舌日に始めたのとだいたい同じようなものだろう。

赤舌日を嫌うその理由は無常の法を知らないからである。無常で変転しやすい現実の境界では、すべての存在し見えるものは変化しそのままではいられない。いかなるものも少しの間も止まっていることができないのだ。

始まったことは終わることなく、志は遂げられず、欲望は消えることがない。人の心は常に動揺し定まることがない。すべては幻のごときものなのである。

「吉日に悪いことをすれば必ず結果は凶と出る。悪いといわれる日に善いことをすれば必ず吉となる」

吉凶は人によるのであって日によるのではない。

第九十二段 訓戒

ある人が弓の稽古をする際に甲乙二本の矢を手に挟み持つて的に向かった。すると師匠が「初心者は二本の矢を持ってはならない。後の矢をあてにして初めに射る矢をなおざりにしてしまう心が働く。弓を射るときは、いつも射損なうことなく、この一本の矢だけで必ず的に当てようと思え」と言った。

たった二本の矢しかないのに師匠の前でなおざりの射方をするだろうか。後の矢をあてにして最初の矢を射損なってもいいなどと思うはずがない。しかし怠る心というものは自分では気づかない。師匠はその心が起こることを知っているのである。この訓戒はすべてのことに通じるものである。

仏道を学ぶ人が夕方には翌日の朝が来ることを思い、朝になればまた夕方の来ることを思って本気で修行することを先延ばしにする。そうした人がこの一瞬間のうちに起こる怠け心を自覚することがあろうはずがない。

いかに今、この瞬間の意識においてすぐに修行をすることの難しいことか。

男子たるもの・・・

第百七段 男子たるもの・・・

「女が何かを言いかけたとき、すぐにうまい具合に返事ができる男ってなかなかいないわね」といたずら好きの女官たちが若い男たちが宮中に来られるたびに「ほととぎすをお聞きになりましたか」と訊ねて、どんな返事をするか試していた。

大納言のなんとかさんは「私のような取るに足りぬ身には聞くことができません」と答えた。ところが堀川の内大臣は「岩倉で聞いたように思います」とおっしゃられたので「これは素晴らしい」「でも『取るに足りぬ身』なんて言ってほしくはないわね」などと批評し合っていた。

だいたい男子というものは女性に笑われないよう立派に育てられなければならないということである。

「浄土時の前の関白殿は幼い頃後白河天皇の皇后様がしっかりと教育なされたからお言葉などが立派なのだ」とある人がおっしゃったということである。

山科の左大臣殿は「卑しい身分の女中に見られることさえ気恥ずかしく気遣いせられる」とおっしゃられた。

もし女がない世の中だったとしたなら装束の着方とか冠のかぶり方もどうでもよく、きちんとする人もいないのではないかと。となると、男にこれだけ気をつかわせる女というのは何者なのだ。

遠慮なく言わせてもらおうと、女の本性はすべてひねくれていると私は思う。自分さえよければいいという思いが強く、むやみに物を欲しがり、つまり利己的で貪欲で物の道理も知らない。すぐに妄想に心をとらわれ、口先も達者だ。

ところが別に言っても差し支えないことでもこちらから聞いたときは言わない。用心して言わないのかと思っていると、今度はまたびっくりするようなことまで聞いてもいないのに自分から喋りだす。一生懸命工夫してうわべを飾っていることは男の知恵より優れているかと思っていると、それがすぐにはがれてバレてしまうことに気づかない。心が素直でなく愚かな者が女である。

その女の意のままになって気に入られようとしている我々男性は何と情けない。何故、女に気を遣ってきまり悪い思いをしなければならないのか。

もし賢女といわれる女がいたとしたら、それは何となく親しみにくく興奮めするような魅力のない女だろう、きっと。

ただ真実が見えず心が迷って女の意のままになっている時だけ、女を優美なものと思えるし、女といることが楽しいこととも思えるのだ。

寸陰惜しむ

第百八段 寸陰惜しむ

寸陰惜しむ、つまり僅かな時間を惜しんでなすべきことに精進する人はなかなかいないものである。それは寸陰惜しむということをよく理解したうえで自分にはその必要はないというのか、それともただ愚かで惜しむ理由がわからないのか。

この愚かで時間を惜しまず怠けている人のために言わせてもらえば、一円玉は軽いけど、これを積み重ねれば貧乏人を金持ちにもするという事に気づきなさい、ということである。だから商売人が一円玉を大切にすることは大変切実なものである。

一瞬という時間は意識できないかもしれないが、その一瞬の積み重ねを止めなければたちまち人生の終わりの時がやってくる。だから、仏道の修行をする者は遠くにある月日を惜しんではいられない。今この瞬間の意識が無駄に過ぎてしまうことを惜しまなければならぬ。

もし、必ず当たるという予言者が来て、明日あなたは必ず死にますと告げられたとしたら、今日が終わるまでの間に何を頼りに何をせよとするだろうか。

私たちが生きている今日というこの日と、明日死ぬと告げられた一日と何の違いがあろうか。同じ一日である。しかもこの一日の間に食事をしたりトイレに行ったり、誰かと話をしたり睡眠をとったり歩いたり、やむを得ず多くの時間を費やしている。その残りの時間がいくらかもないのに無駄なおしゃべりをし、無駄なことを思い、無駄なことをして時間を過ごす。こうして一日を費やし、月日が過ぎて一生を送る。実に愚かなことだ。

中国の謝靈雲という人は法華経翻訳のときの筆録者であったが、心の中はいつも世に出ることを思い描いていたので慧遠法師は無益なことをしているとして白蓮社の教団生活の仲間入りを許さなかった。

しばらくの間でも寸陰惜しむ心のない時は死んでいるのも同然である

光陰、つまり時間は何のために惜しむかということ、心中あれこれと思考することなく、周囲には俗事をなくして、悪事を止めようと思うものは止め、膳を行おうと思うものは行うがためである。

名人1、名人2

第百九段 名人1

木登り名人と世間の人々が呼ぶ男があるとき弟子を高い木に登らせて梢を切らせた。ところがとても高くて危険なときは何も言わなかったのに、軒の高さぐらいまで降りてきたときに「気をつけて降りろよ、怪我するぞ」と注意したので私は

「この高さなら飛び降りることだってできるのに、何故今頃になって注意するのですか」訊ねた。すると名人は

「そこですよ問題は。目のくらむような高いところとか、枝が細くて危ないようなときは自分自身が怖いから気をつけるんです。怪我をするのは必ずもう安全だと思われる高さに来てからなんです」と言った。

身分の低い単なる木登り上手だがその言葉は聖人の戒めと同じである。

蹴鞠も難しいところをうまく蹴り上げた後で、もう安心だと思うと必ず蹴り損ねてしまうと言われている。

第百十段 名人2

双六名人と世間で呼ばれている人にその極意を聞いてみると「勝とうと思って打ってはならない。負けないという気持ちで打つべきだ。どの手が早く負けてしまうだろうかと考えて、その手を避け、一目でもいいから遅く負ける手を選ぶべし」と言う。

さすがにその道を知る名人の教訓、自分自身の修行もそうだが、国家を安泰に運営する方法もまたそのとおりである。

社交的儀礼、命名、輸入品

第百十二段 社交的儀礼

明日は遠い国へ旅立つ人がいる。荷造りも忙しく友との別れに心も乱れる思いでいるかもしれない。そんな人に対して心落ち着けねばできない仕事をたのむだろうか。

突然の事態に直面し、それをせわしなく処理し、また嘆き悲しむ不幸のある人は人の言うことを受け入れることができない。他の人の不幸を見舞うこともしない。喜びを共有することもしない。だからといってなぜ見舞わないのだ、なぜ喜んでくれないのだと恨む人もいない。次第に年も寄っていき病気にも取り憑かれ、まして出家して世を捨てた人などもこれと同じようなものである。

人間の儀式や社交的儀礼というものは世間体があってなかなか無視できない。無視できないからといって全部きっちり従っていると、やりたいことは多くなり体は疲れて心の休まる暇もなくなり、一生は雑事のこまごましたことに妨げられて空しく終わってしまう。

日が暮れようとしているのに我が道のりはまだまだ遠く、自分の命はすでに終わりの時が近づいている。

今こそあらゆる心身の束縛を捨てる時である。信義も守るまい。礼儀も気にすまい。この気持ちをわからない人は私のことを狂っていると言えればいい。正気じゃない、人の情がないとでも思うがいい。人の誹りも苦にならないし誉め言葉も私の耳には届かない。

第百十六段 命名

寺院の名前やその他の色んなものに名前をつけるとき、昔の人はちっとも深く考えずにただありのままに簡単につけていた。この頃はよくよく工夫を凝らし、名前に才覚を示そうとしているように聞こえて実にわずらわしい。人の名前も見慣れない文字を使ったりしてまったく無益なことだ。

何事につけても珍しいことをあえて探して普通と異なる説を好むのは、教養の浅い人の必ずやることらしい。

第百二十段 渡来品、輸入品

中国からの輸入品は薬の他はなくても別にどうってことはないのではいけないと思う。書籍類はすでに多くがわが国に入っており、書き写すせばすむことだ。

中国からの輸送船が困難な道のりで実に役にも立たない物を一杯に詰め込んでやってくるのはとても馬鹿げている。

「遠くにあるものは宝としない」とか、また「なかなか手に入らない財貨を尊ばない」とも古書のなかにある。

富裕と貧乏と贅沢の定義、ギャンブラー、身の程を知る

第二百二十三段 富裕と貧乏と贅沢の定義

益にもならないことをして時間を浪費する人を、愚かな人或いは道理に適わぬことをする人という。

国のため主君のため、やむを得ずしなければならないことが非常に多い。では、それ以外の余分な時間がどれくらいあるだろうか。いくらもない。そこで考え直す必要がある。

人が生きる上でやむを得ずしなければならないことの第一に食物、第二に着る物、第三に住む家である。人間にとって必要不可欠のものはこの三つだけである。飢えることなく寒さに震えることなく風雨をしのげる家があり、静かに時を過ごすことを楽しみとする。

ただし人は皆病気になる。病気になるとその苦しみは耐え難い。医療を忘れてはならない。

薬を加えて四つのこと、この四つが満たされないのを貧しいこととする。

この四つが欠けないことを富とする。

この四つ以外が加わることを贅沢とする。

この四つのことがつつましく守られるなら、誰が生活に不足があると言うだろうか。

第二百二十六段 ギャンブラー

ギャンブルをしていていよいよ負けが込んできたとき、残った金を全部賭けて起死回生を狙おうなどと思ったときは絶対に負けて有り金をなくすからこれ以上打ってはいけない。

いずれ勝ち続けるときは必ず来るからそれまでおとなしく待っていなくてはならない。そういった勝負の時を知っているのを良いギャンブラーというのだ、と誰かが言っていた。

第二百三十一段 身の程を知る

貧しい人はお金を渡すことを謝礼だと思い、老いた者は力仕事で礼を返そうとする。しかし、身の程を知って、できないときは速やかに身を退くことこそ賢い選択である。それを相手が許してくれないとしたらそれは相手が悪い。身の程を知らず無理に頑張るのは自分の間違いである。

貧しくて身の程をわきまえないと盗みを働くようになり、力もないのに無理をすればやがて体をこわす。

己を知る

第百三十四段 己を知る

高倉院の法華堂の三昧僧でなにがしの律師とかいう人がある時、鏡に映った自分の顔をまじまじと見て、自分の顔があまりにも醜くとてもひどいことに情けなくなり、その後鏡そのものまでが疎ましく思われて鏡を見るのがなくなったばかりか、人前に出ることすらなくなった。法華堂のお勤めに参加するだけでその他は部屋に籠もりきりだったと聞いたが、それこそ珍しいと思われた。

賢そうに見える人も他人のことばかり推測してあれやこれやと言うけれども、自分のことは知らないものである。自分のことを知らないで他人を知る道理のあろうはずがない。それならば自分を知っている人を、道理を知っている人と言うことができるだろう。

自分の醜さを知らず、自分の心の愚かさも知らず、芸の拙さも知らず、自分の身分の取るに足らないのも知らず、年老いてしまったことも知らず、病に冒されるのも知らず、死がそこに迫っていることも知らず、目標達成の道も徹底していないということも知らない。

このような自分の欠点を知らないのだから、他人が自分のことを悪く言っていることなど知るわけがない。

姿形は鏡を見ればわかる。年は数えればわかる。

自分のことを知らないというわけではないがどうしていいかわからないのであれば、知らないのと同じだと言えよう。

容姿を良く見せて年を若返らせよと言っているのではない。拙さを知ったならなぜすぐに身を退かないのか。年を取ったと思ったらなぜ隠居して老後を安らかに過ごせないのか。

だいたい人に好かれてもいないのに交わろうとするのは恥ずかしいことだ。容姿が悪く思慮分別のない者が役人になり、無知なくせして博学の人たちの中に入り、下手なくせに上手な人たちの座に列なり、白髪頭で若く壮んな者たちと肩を並べ、まして自分の力では達成できない分不相応なことを望み、できなかつたと憂え、来そうもないことを待ち、人に対して恐れを抱き、人に媚をへつらうのは、人にされた恥ではなく、自分の欲を貪る心によって自らを辱めているのである。

欲張ることが止められないというのは死が目前に迫っているということを自覚していないからに他ならない。

知ったかぶり 2

第百三十六段 知ったかぶり 2

医師の和気篤成が、亡くなられた後宇田法皇の御前に伺った時、供えの御膳が法皇に差し上げられた時の話。

「今差し上げられた色々な御膳について名前や効能について教えてください」との質問に何も見ずに答えたので

「薬学の本を参照したほうがいいですよ。そうすればひとつも間違えることなく答えられると思います」と申し上げた。その時、今は亡き六条の内大臣が来られて、ついでにこの有房にも教えていただきましょう、と言って

「まず、『しお』という字は何偏でしょうか」とご質問されたところ篤成は「土偏でございます」と答えた。六条の内大臣は「あなたの知識はこの程度ですか。よくわかりました。これ以上聞きたいことはありません」と申されました。

一座の人々が大笑いになって篤成はいたたまれなくなって退出してしまった。

その頃「しお」は「塩」と「鹽」とがあって土偏とは決まっていなかった。知ったかぶりをせずに本で確かめておけばよかったのに。